

巻頭言

2030 VISION に向けて Toward the 2030 Vision



執行役員

佐賀 尚人
Naohito Saga

マツダは創業以来平和都市広島に根差す企業である。今年 G7 広島サミットが開かれたことを契機に、私自身もこの意義を深く考え直す良いきっかけとなったと考える。創業者の「工業で社会に貢献する」という志の元、戦時下において一瞬で全てが失われた日から今日に至るまで、我々の奥底には幾つもの飽くなき挑戦をしてきた歴史が刻まれている。その思いを DNA として受け継ぎ、今日までバトンを繋いでいただいた諸先輩方に感謝の意を表すると共に、今後もマツダの存在意義を示し、社会に貢献すべく、価値あるものづくりの力を高めていきたい。

さて、今年マツダでは、我々の存在意義をあらためて確認し、マツダが大切にしてきた価値観とマツダが解決に貢献できる社会課題を踏まえパーパス「前向きに今日を生きる人の輪を広げる」を定めた。また、そのパーパス実現に向け、マツダの約束としてのプロミス「いきいきとする体験をお届けする」、実践するうえで大切にすべき振る舞いや価値観、行動様式としてのバリューズ「ひと中心」「飽くなき挑戦」「おもてなしの心」を定めた。これらをマツダの北極星とし、ここへ向かう一里塚として 2030 年に到達していきたい姿を 2030VISION として「走る歓び」で移動体験の感動を量産するクルマ好きの会社になる」とした。この背景には、デジタル革新をはじめとして生活者の行動形態や価値観が大きく変化していること、地球温暖化による気候変動や資源・エネルギー問題、また、世界的な社会の分断など地球規模での重要課題が山積していることなど、我々自動車業界も変わらなければならない 100 年に一度の大変革期に突入し、先が見えない中で、もう一度自分たちの居場所を定義する必要性があったからに他ならない。

技術に関しても同じことが言える。これまでのように、単に技術の高さを目指すものづくりから、お客様に実体験を通じて感じていただきたい価値とは何か？そのためにはどんな技術が必要であるか？を考えなければ、社会に貢献しているとは言えなくなってきたと感じる。語弊を恐れずに言うのであれば、技術は手段であり、その先にある生活者への価値提供こそが重要である。技術革新の中で自動車が提供できる価値範囲は拡大した。単に移動をするだけのものではなく、自動車の内外と繋がることにより様々なことが提供可能となってくる。今後もその範囲は広がってくるであろう。よって、既知の自動車業界の枠に囚われない発想や技術連携をしていかなければならない。既存のバリューチェーンやサプライチェーンも変化し、同時に技術難易度は確実に上がり、世の中の様々な技術や機能が融合していき、これまでにない生活者の行動変化や更なる価値観変化を起こしていくのである。

この考え方を念頭に、マツダのものづくりは技術（シーズ）起点から価値提供（ニーズ）起点に舵を切っ

た。お客様への提供価値を第一に考え抜き、それを実現するための保有技術、新技術を組み合わせ、融合させて実現させる、いわゆるソフトウェアファーストの考え方である。これを実行に移すには単一技術の追求をしているだけではバランスを失う。実現したい価値を全てのエンジニアが把握し、同じ方向を向き、互いの技術を理解し合いながら連携させていく必要があり、これまで以上に強固な連携作業は必須、既存のプロセスやツール・イネーブラーも同時に再構築していかなければならない、非常に大がかりな転換である。同時に、自動車業界に携わる責務として、社会課題であるカーボンニュートラルの実現をしていかなければならない。これを達成しなければ、マツダの存在意義は薄れ、パーパスの実現にも至らないことを覚悟しながら進めている。しかしながら、この変革は過去を否定するものでは決してない。マツダでは 2007 年に技術開発の長期ビジョン「サステイナブル“Zoom-Zoom”宣言」を策定し、その当時からライフ・サイクル・アセスメントの視点で CO₂ 削減が必要であり、その実現に向けた施策とし、マルチソリューションを掲げ、ぶれることなく具現化を進めてきた。その中核として、ビルディングブロック構想により技術革新とプロセス革新を両輪として完成させながら一つ一つ資産として積み上げ、向上させていくアプローチをとってきた。その過程で、2000 年初頭より進めていた社内デジタル革新としての Mazda Digital Innovation では、モデルベース開発、モデルベースリサーチが可能な人材育成と IT 設備の導入および進化を進めてきている。今後もこれら資産をベースに、積み上げていく技術の錬成による価値創造および、それを可能とするデジタルトランスフォーメーションを進めていくことに変わりはない。現在は新たなステージとして、複雑化・高度化する技術に対応すべく、モデルベース開発やモデルベースリサーチの進化と共に社内 IT 教育を進め、デジタルリテラシーの向上と実装を図っている段階である。

ここで、忘れてはならないことがある。技術進化・イネーブラーの進化があっても、それを使うのは人である。確かに生成 AI に代表されるように、様々なことが便利になってきている。1 週間かかっていた課題解決が、瞬時にできることもあるだろう。今後も進化を続け、エンジニアのアプローチも変わってくるであろうことは容易に想像がつく。しかしながら、この AI にどのようなデータを入れどのような結果を導くかは、人がその特性を理解し、熟考し、使い方を吟味する必要がある。つまり、これまで以上の知識、思考、エンジニアセンスが欠かせない。そういった意味では、いつの時代になっても技術は人が生み出すクリエイティビティー（価値創造）なのである。CASE 時代と言われて久しいが、こう考えると Connected, Autonomous, Shared, Electric 全てが手段であり、その先にある生活者の得る体験にどのような価値があるのか？これらを使い我々は社会にどんな貢献が出来るのか、そしてその結果として未来に我々が何を残すのか、100 年に一度の大変革期に自動車業界に身を置く一人として日々考えている。そして、いきいきとした体験として一人でも多くの方に喜んで頂けたらと切に願う。

本号では、マツダ最新の商品となる北米向け CX-90 ならびにロータリーエンジンを発電機とした MX-30 Rotary-EV を特集する。どちらの商品も、マツダがこれまでのビルディングブロック戦略および最新のモデルベース開発・モデルベースリサーチを駆使した技術を織り込んでいる。少しでも参考になれば幸いである。

最後に、寄稿頂いた全ての方々に感謝すると共に、本技報をご覧いただいている、同時代を生き抜く全てのエンジニアの方々にエールを送りたい。